田村市
都路町頭ノ巣
集落調査
報告書

福島大学経済経営学類
藤原遥ゼミナール

2023年度
集落自主活動に係る伴走支援事業実施報告書

田村市都路町頭ノ巣

集落自主活動に係る伴走支援事業実施報告書

目次

1　活動の目的 2
2　スケジュール 2
3　活動内容 3
3-1　9・10 月の調査 3
3-2　12 月の調査 5
4　計画書の内容 5
4-1　目標とスケジュール 5
4-2　事業①　桜・イチョウをみる会 6
4-3　事業②　お庭訪問とお庭のフォトブック制作 7
4-4　事業③　料理交流会とレシピ本の制作 8
5　今後の展望 9

1　活動の目的

藤原遥ゼミナールでは、福島県田村市都路町頭ノ巣集落を対象にして調査・活動を行ってきた。今年度は、「集落自主活動に係る伴走支援事業」の最終年度である。集落計画をまとめることを目標に取り組んだ。これまでの調査結果を踏まえながら集落の課題や魅力を整理しなおし、住民とのワークショップを実施して計画書を作成した。

2　スケジュール

今年度は、2023 年 9 月 30 日、10 月 1 日、12 月 9 日の計 3 回の調査を実施した。

(1) 1 回目　2023 年 9 月 30 日　戸別訪問及びヒアリング調査、集落歩き

図 1　戸別訪問時のお庭のお花（1）

図 2　戸別訪問時のお庭のお花（2）

図 3　戸別訪問時のお庭の様子

図 4　戸別訪問時のヒアリングの様子

図 5　集落歩きの様子（1）

図 6　集落歩きの様子（2）

(2) 2 回目　2023 年 10 月 1 日　頭ノ巣集会所でのワークショップ

図 7　住民とのワークショップの様子

図 8　住民の意見を整理

(3) 3 回目　2023 年 12 月 9 日　頭ノ巣集会所でのワークショップ

図 9　住民との意見交換

図 10　食事をしながらワークショップ

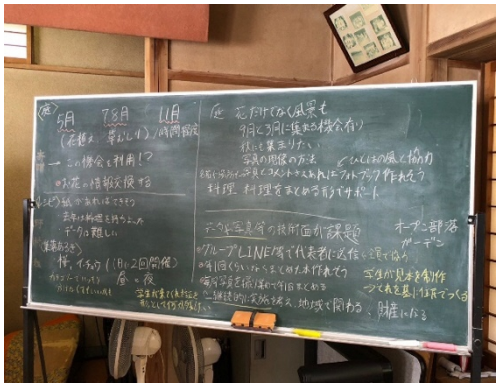

図 11　ワークショップ資料

3　活動内容

3-1　9・10 月の調査

9 月 30 日(土)には、一軒ずつ訪問して聞き取り調査をした。集落には高齢者が多く、住民全員がワークショップに参加することは難しい。より多くの住民の意見を聞くために、高齢者のいる家を中心に訪問した。 2 班に分かれて合計 15 軒を訪ねた。

調査では、コミュニティおよび景観というテーマを設けて聞き取り調査をした。

(1) コミュニティに関する調査

コミュニティに関しては、「東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、福島原発事故）前後、および新型コロナウィルス感染拡大前後における住民同士の交流の変化」「今後、住民同士の交流をどうしていきたいか」の 2 点について質問した。

聞き取り調査の結果、以下のことが明らかになった。

コミュニティに関しては、福島原発事故前は、参加の頻度に個人差はあるものの、多くの住民が集落の集まりや、行事、共同作業に参加していたことが分かった。福島原発事故後は、結と呼ばれる相互扶助の関係性が薄まり、集落の集まりも少なくなっていた。そして、新型コロナウィルス感染拡大によって、福島原発事故後もかろうじて続けていた集落の行事でさえも行うことが困難となってしまった。集落で集まる機会や、住民同士が交流する機会はほぼなくなってしまった。

近年、新型コロナウィルス感染に対する国や自治体の規制が緩和された。「今後、住民同士の交流をどうしていきたいか」と聞くと、次のような意見が挙がった。集落の集まりや行事があれば、積極的に参加したいと考える住民が多かった。他方で、参加をしたくとも、高齢や病気を理由に、毎回参加することは難しいと回答した住民もいた。住民が参加を希望する理由には、住民同士でコミュニケーションを取る機会を増やすことや、世間話などをしたいというような意見があった。

(2) 景観に関する調査

景観に関しては、「現在の集落における景観をどのように感じるか」「集落の景観を良くする既存の活動への参加を希望するか」「景観を良くするために行ってみたい活動」の 3 点を質問した。

現在の集落における景観については、「豊かな自然があるのに、十分に活かすことができていないのがもったいない」「高齢化が進み、森林や田畑を手入れする跡継ぎがいない」などの課題が挙げられた。景観を良くするための活動については、現在集落の女性を中心に活動している花を植える活動に参加している人が複数いた。中には、体調を崩して花植えの活動に参加できなくなった人もいた。話を聞いたすべての人が、自宅の庭をきれいに手入れしていた。「景観を良くするために行ってみたい活動」については、「できる範囲で自宅の庭をきれいにしていきたい」「集落の景観を良くするためには、あまり手入れをしなくてもきれいに育つものを植えたいという」意見が挙げられた。

(3) 集落の魅力に関する調査

最後に、「集落に住んでいて良いと感じるところ」についても聞いた。

集落の良いと感じるところを伺うと、ほとんどの人が、住民の人柄の良さと回答していた。困った時に助けてくれたり、思いやりがある住民が多いようだ。また、自然の豊かさも魅力の一つとして挙げられた。

3-2　12 月の調査

12 月 9 日(土)には、ワークショップを実施し、集落計画の内容について住民とともに最終確認した。9・10 月の調査でワークショップを実施した。そこで、今後取り組みたい活動を住民に聞いたところ、集落歩き、お庭のフォトブックの制作、レシピ本の制作、の 3 つが挙げられた。この 3 つの事業を軸にして、住民の意見を踏まえながら、学生で事業計画を作成した。

12 月の調査では、集落計画の一案を学生から説明したうえで、住民から修正点などの意見をもらった。開催時期や回数、住民だけでも事業実施ができるかどうか、入念に確認していった。話し合いの結果、集落歩き、お庭のフォトブックの制作、レシピ本の制作の 3 つの事業に課題があることがわかった。集落歩きは、高齢者にとって長時間の歩行が厳しいという課題が挙げられた。庭のフォトブック制作および、料理のレシピ制作では、データや写真、デザインなどを住民で行うには技術的な課題があった。最後に、事業に対する課題や、住民の意見を整理して、計画書の修正点を住民と確認した。

4　計画書の内容

4-1　目標とスケジュール

これまでの聞き取り調査やワークショップを通じて、「将来を担う子や孫世代のために景観を良くしていきたい」「住民同士で交流する機会が減った」という意見を住民から多数寄せられた。

そこで、将来目標を 2 つ設定した。一つは景観整備に関する目標で、「美しい景観を後世に残す」である。言い換えれば「後世に誇れる景観を残す」という意味である。ここには、先祖が美しい景観を後世に残してくれたように、自分たちも美しい景観をつくり、将来世代が頭ノ巣を訪れた際に景観を楽しんでもらいたいという思いが込められている。少子高齢化および人口減少は今後も深刻化していく可能性が高い。なるべく手のかからないかたちで、今ある集落の資源を活かして自然に近い形で美しい景観をつくっていくことを目指している。

もう一つは、コミュニティ再生に関する目標で「住民同士のつながりを深めていく」ことである。福島原発事故に加え、新型コロナウィルスの感染拡大によって住民同士の繋がりの希薄化に拍車がかかった状態が続いている。人口減少や、人々のライフスタイルの変化により、従来と同じかたちで結を再興させることは難しい。住民が無理なく、楽しいと思える範囲で、現在取り組まれている景観整備活動の継続や、時代や住民のニーズに合わせて行事を新しくつくっていくことが、コミュニティの再構築につながると考えられる。

2 つの目標は相互に関連している。景観整備をするなかで、住民同士の交流が生まれ、コミュニティ再生につながっていくと考えている。

将来目標を達成するために、頭ノ巣集落では、桜・イチョウをみる会、お庭訪問、料理交流会を通年の活動として実施していく計画を立てた。具体的には、以下のようなスケジュールにて 3 つの計画の実行を検討している。

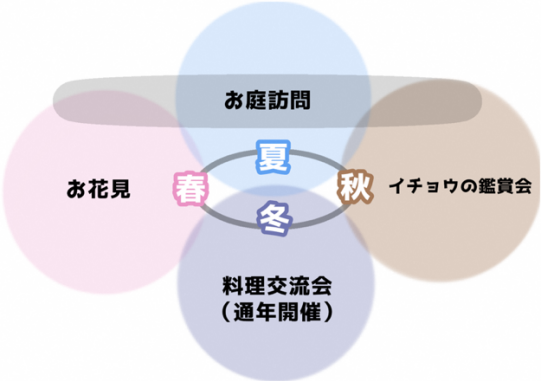

図 12 スケジュールに関するイメージ
出所：筆者ら作成。

4-2　事業①　桜・イチョウをみる会

(1)事業の背景・目的

昔、頭ノ巣集落では、花見は年中行事の一つであった。しばらく集落の行事からは消えていたが、住民が無理なく、楽しく取り組むことができる行事として、これから復活していく予定である。桜と乳イチョウは、どちらも住民によって植えられ、守られてきた。住民にとって愛着のある場所でもある。桜・イチョウをみる会を通じて、住民同士の交流を深めていくことが目的である。

(2)事業内容

桜は花が咲く 4～5 月頃に、乳イチョウは紅葉してライトアップする 11～12 月頃に、集落の住民が食事を持ち寄って集まることを考えている。

開催にあたっては、身体が不自由な住民や移動手段のない住民への配慮が必要となる。

図 13 桜・イチョウをみる会の場所イメージ
出所：筆者ら作成。

4-3　事業②　お庭訪問とお庭のフォトブック制作

(1)　事業背景・目的

個人宅の庭が綺麗に整備されていることがこの集落の魅力の一つである。それでも、集落の住民同士で庭を見にいったり、情報を共有したりすることはなかったという。そこで、恒常的にできる活動としてお庭訪問、発展的な活動としてお庭のフォトブック制作を行うことになった。

目的は 4 つある。1 つ目は住民同士の親睦を深めることである。花植えに参加している女性たちから集まる機会を増やしたいという声があった。この活動が住民の交流の場になっていくと考える。2 つ目は住民のやりがいを感じる活動となることである。他人から評価されることによってやりがいが高まる。3 つ目は、集落全体の景観について関心もつきっかけとなることである。自宅の庭も集落の景観の一部として意識されるようになり、集落全体の景観についても関心が広がる。4 つ目は、集落の景観を後世に残すことである。将来世代に頭ノ巣集落を知ってもらい、集落の財産として美しい景観を残すためにも、写真に撮って記録する必要がある。フォトブック作成がその記録として後世に伝えるものになると考える。

(2)事業内容

- お庭訪問（毎年実施）
  有志を募り、庭訪問の予定を立てて実行する。
- お庭のフォトブック作成（発展的な活動）
  春から秋までの間にそれぞれの自宅の庭の全体像、お気に入りの花、季節の植物などを写真に撮る。写真を現像してアピールポイントなどを書いて冬頃に写真展をする。写真展では参加者からコメントをもらうようにする。写真展で展示した内容について、外部の人や組織による支援のもとフォトブックを作成する。

図 14 お庭のフォトブックのイメージ

出所：筆者ら作成。

4-4　事業③　料理交流会とレシピ本の制作

(1)　事業背景・目的

頭ノ巣集落の女性たちは料理上手であり、料理を用いることで交流しやすいという意見があった。男女や世代で分けずに、多くの住民が集まれるような交流機会が必要との声もあった。そこで、毎年実施する活動として料理交流会、発展的な活動としてレシピ本制作を考えた。

料理交流会の目的は、住民同士の親睦を深めることである。レシピ本制作の目的は、この集落で親しまれていた料理を形として残すためである。また、レシピ作成を通して住民間の交流も促進できる。

(2)　事業内容

- 料理交流会
  集会所に各々の得意料理や他の参加者に紹介したい料理を持ち寄って一緒に食べる。一緒に料理を食べることでより住民同士の結束が強固になり、災害時などに円滑な意思疎通が可能になる。
- レシピ本制作
  この集落の郷土料理、それぞれのオリジナルの家庭料理などを掲載する。レシピとエピソードも添える。レシピ本制作には外部の人や組織からの支援が必要となる。

図 15　レシピ本のイメージ

出所：筆者ら作成。

5　今後の展望

頭ノ巣集落を対象とする福島県の「集落自主活動に係る伴走支援事業」は今年度で最後である。福島県の助成事業が終わったとしても、今後も頭ノ巣集落との関わりを続けたいと考えている。頭ノ巣集落での取り組みを、今後の調査研究に活かしていきたい。今後の展望として、以下の 2 点を挙げる。

第一に、計画書に基づき事業を実施するための伴走支援をすることである。住民だけで実施できるような事業を検討してきたが、実際には計画通りにいかないこともあると考えられる。また、住民からは、これまで藤原遥ゼミナールと頭ノ巣集落で交流をしてきた 4 年間を無駄にしたくないという意見も聞かれた。藤原遥ゼミナールは、今後も、頭ノ巣集落と交流を続けていきたいと考えている。卒業後は、支援という枠組みを超えて、交流を続けていきたい。

第二に、頭ノ巣集落での活動を今後のゼミ活動に活かしていくことである。藤原遥ゼミナールでは、今後も特定の地域に入り、調査研究を行っていく予定である。頭ノ巣集落での 4 年間の活動を総括して、次の活動に活かしていきたいと考えている。

田村市都路町頭ノ巣
集落自主活動に係る伴走支援事業実施報告書

発行日：2024年1月

編集：福島大学経済経営学類　藤原遥ゼミナール